

体験活動のススメ

～子どもの体験活動についての提言・実践事例～

平成28年4月 筑紫野市社会教育委員の会

目 次

1	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	子どもの体験活動について・・・・・・・・	2
3	筑紫野市の子どもの体験活動における課題・・・・・・・・	3
4	筑紫野市の子どもたちの体験活動をひろげるために・・・・・・・・	5
5	子どもたちの体験活動をひろげるために社会教育委員ができること・・・・・・・・	7
	※ 体験活動のススメ（全体構想）・・・・・・・・	8
6	地域での体験活動のあり方（筑紫野市における実践事例）・・・・・・・・	9
	①「生活まると体験活動（通学合宿）」に取り組もう	
	②「困難体験活動」にチャレンジさせよう	
	③「子どもの居場所づくり（ふれあいの場所づくり）」に取り組もう	
	④「働く・生産する体験活動」を積みませよう	
	⑤「ボランティア体験活動」に参加させよう	
	⑥「地域が好きになる体験活動」に取り組もう	
7	家庭と地域の体験活動をつなぐには（家庭に、地域に望むこと）・・・・・・・・	19
8	社会教育委員の会として・・・・・・・・	20

1 はじめに

社会教育委員の職務については、社会教育法に定められています。その第17条第3項において、「市町村の社会教育委員は、当該市町村の教育委員会から委嘱を受けた青少年教育に関する特定の事項について、社会教育関係団体、社会教育指導者その他関係者に対し、助言と指導を与えることができる」とされています。また、平成4年に出された「社会教育委員の制度について—社会教育委員及び同委員会議の活性化について—」において「(前略) 青少年を取り巻く環境は大きく変わりつつある。(中略) 今後、社会教育委員においては青少年教育に関して青少年団体、PTA等の社会教育関係団体の育成、団体活動の促進、指導者の養成等に一層積極的に取り組んでいくことが期待される。」とされています。

青少年教育とは、次世代の育成、つまり、ふるさと筑紫野を背負ってたつ人材の育成です。そしてそれは、自立した個の育成、「生きる力」を備えた個人の育成にほかなりません。生きる力は、学力を生活に応用できる力と捉えれば、子どもがいかに多くの体験を積むかということが大きなカギとなります。

筑紫野市社会教育委員の中には、青少年の育成に関わる団体からの推薦委員や、地域の中で子どもたちの体験活動を実践している委員がいます。また、社会教育委員を対象とした様々な研修会においても、子どもの体験活動について考える機会がありました。

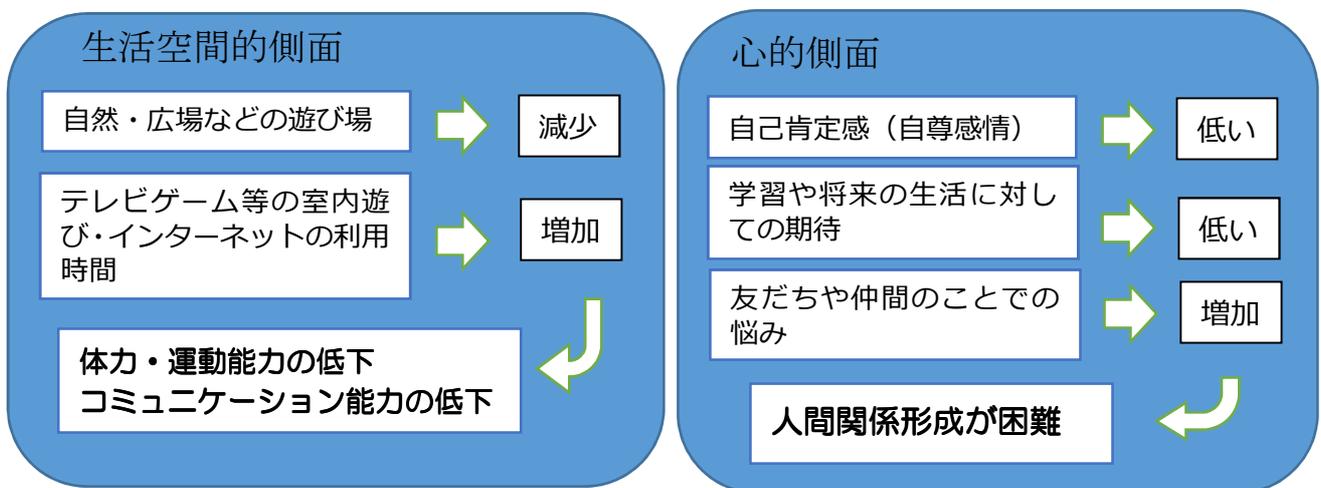
これらの実践や研修と連動し、筑紫野市社会教育委員の会では、平成26年度から「子どもの体験活動」をテーマに議論を重ねてきました。地域の大人は、そして私たち社会教育委員は、何ができるのか、何をすべきなのか・・・そのミッションを果たす行動のきっかけや活動の考え方のヒントとなることを期待して提言(平成27年4月)し、筑紫野市における実践事例(平成28年4月)をまとめました。

2 子どもの体験活動について

子どもの頃の体験活動は、豊かな人生の基盤になるものです。子どもの体験活動の有用性、子どもを取り巻く環境、子どもたちの現状について考えてみました。

子どもの体験活動の有用性については、「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（独立行政法人国立青少年教育振興機構・H22）に詳しくのべられています。「子どもの頃の体験活動が豊富な人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い」「少年期の体験が多い人ほど思いやり・やる気・人間関係力等の資質・能力が高い」など、子どもの頃の体験は、その後の人生に影響することが結論付けられています。

一方で、子どもたちを取り巻く環境は次のように変わってきています。



また、平成25年に中央教育審議会において出された答申「今後の青少年の体験活動の推進について」では、子どもたちの現状について次のように述べられています。

- 心や体を鍛えるための負荷がかからない・・・「無重力状態」
 - 便利・快適・安全な現代社会においては青少年は全力を出す「スイッチ」を入れるチャンスを失っている・・・意識的に目標をもって体験活動等にチャレンジする機会を創出する必要がある
 - これまで身近にあった遊びや体験の場や「本物」を見る機会が少なくなった
 - 「体験格差」・・・保護者の経済力・保護者自身の経験の多寡、学校の判断による格差
 - 子どもたちの人間関係能力の低下・・・生活様式や価値観の変化で「ナナメの関係」が希薄
- 体験活動を推進する社会的な仕組みの構築が必要である。

このような子どもたちの現状は、筑紫野市においても同様であるといわざるをえません。

○ 「子どもの体験活動」とは・・・

「体験」とは、文字どおり自分の身体を通して経験するという意味です。教育的には、「事実や事象との関わりの過程で、主として感覚機能を用いて自己を変容する営み」と定義されます。

しかし、「体験」は、その出現が偶発的であり、未整理状態が多いので、これを青少年の人間形成に役立つように、教育的配慮で編成したものを「体験活動」と呼びます。

3 筑紫野市の子どもの体験活動における課題

筑紫野市においても、子どもの体験活動にかかるさまざまな取り組みがなされています。地域が主体となって取り組んでいる3つの実践例をもとに意見交換（ワールドカフェ）を行った中から、見えてきた課題を整理してみました。

◆ 3つの実践例

- ・ステキな夏休み教室について（「体験活動の場づくり」を主眼に）
- ・子ども会活動について（「親のかかわり」を主眼に）
- ・通学合宿について（「子どもが主役の活動」を主眼に）

◆ 意見抜粋

①効果的な体験活動の場づくりとは

体験活動の場づくりのポイント

- ・事業（イベント）の場づくりの要素は、①物理的場の確保②人集め（支援者：高齢者・親・地域の人／対象者）③マネー集め、である。
- ・「場づくり」の条件は「地域の教育力／組織力」である。
- ・何の効果かをねらうかを具体的に（お手伝いができる・あいさつができる・人と協力、強調できる・友達を大切にできるなど）。
- ・支援者は何のための体験活動かを知る・・・「目標」の共有・具体的な行動まで

多世代交流の視点

- ・高齢者への尊敬、高齢者との接触を図るような場がほしい
- ・高齢者とともにする活動は双方により効果をもたらすのでは（ラジオ体操など）

体験活動の機会の充実

- ・行政区を越えての場づくりはできないか
- ・時間がない子とヒマな子の格差が大きい
- ・土曜日の活動の是非・・・子どもも忙しい

②親のかかわり方はどうあるべきか

保護者と地域の関わり

- ・都合のいいつながりしか持ちたくない？ ・親のエゴで子どもへのかかわりを決めていないか
- ・トラブルを起こしたくないから地域と関わらない
- ・楽しいと参加する、必要だと参加する
- ・共働きの父母は忙しくて地域の子ども育成の活動に参加することもむずかしい。ひとり親も・・・
- ・学校の地区委員と育成会の関わりは？
- ・子ども会や地域活動に親も子も参加しよう！－達成感・感動・楽しみ

保護者と子どもの関わり

- ・親として（大人として）の姿を見せているか？（挨拶、モラル全般・・・）
- ・家庭の中における父親＆母親の立ち位置はできているか
- ・つらいことを乗り越えるすべを親は教えて
- ・子どもがどれだけのことがやれるか、親は把握できていない
- ・父親が参加しないのは、母親がそうしているのでは（PTAなどからの情報を「どうせ『お前に任せられている』になる」ので日常的に知らせておらず、参加だけ要望する）
- ・徹底して支援に回る我慢強さ
- ・子どもに冒険をさせる度量

③子どもが主体的に活動するためには

大人たちができること

- ・「きっかけづくり」と「下支え」
- ・子どもが主体的に活動する諸条件を考え、整える「物理的」「人的（老人）」「金銭的」
- ・楽しくなる環境づくり
- ・興味をひくようなプレゼン
- ・場を作ったら子どもたちに任せる 細かく世話をしない
- ・「させる」から「する」へ
- ・大人が口出しするのではなく、「じゃあ、どうする？」と投げかける。
- ・ほめることは大切（お世辞はダメ）・大人は見守る、口出しを控える
- ・大人は支援に徹底する（がまん強さ）
- ・本来子どもは主体性をもっているのに、摘み取っている大人？
- ・子どもが持っている可能性は無限である、と思っていますか！！

子どもたちに望みたいこと

- ・異学年交流で面倒見がよくなる
- ・高学年・・・いい格好するのが恥ずかしい・逃げる⇔一方で「目立ちたがり」も
- ・一人ひとりの持ち味は同じでない、人と違っていてもいいことを教える／学ぶ
- ・日ごろからの小さなチャレンジを大切に
- ・認められる体験・・・自尊感情
- ・遊びは学習の一步 主体的な遊びの創造から
- ・自分のためになることと人のためになること
- ・今までできなかったことへの関心、取り組み

地域での体験活動では、取り組んでいる地域と取り組めていない地域で格差が生まれているといえます。そして、体験活動に取り組む大人の姿勢によって子どもの体験の質が変わってしまうということがあげられています。また、いくら地域で熱心に子どもの体験活動に取り組まれていても、家庭（保護者）に届かない、家庭に理解がなければ子どもは参加することができない、参加できたとしてもそこで得たことを反芻したり活かしたりする機会は減ってしまうといった課題が浮かび上がってきます。

子どもの体験活動についてのさまざまな課題を整理すると、「地域での体験活動のあり方」と「家庭（保護者）と地域での体験活動をつなぐには」の2点に集約することができます。



4 筑紫野市の子どもたちの体験活動をひろげるために

私たちは、筑紫野市の子どもたちが多くの体験活動をすることで、豊かな人間性をはぐくめるよう、次のことを提案します。

(1) 地域での体験活動のあり方

○体験活動に関わる大人たちは、手や口を出すのではなく、背中を見せましょう

体験活動は、子どもが主体性をもって活動する（もしくは、活動できたと感じる）ことが重要です。安全のためにも事前の段取りや運営の下支えは必要ですが、子どもたちが知恵をだしあい、不便さを乗り越える体験を大事にしたいものです。また、子どもたちは、体験活動に関わっている大人たちがどうふるまっているかを見ています。モラルやマナーはもとより、手本となるような、「大人って素敵だな」と思えるような「人間力」を見せましょう。

○体験活動に関わる全員で、目的・目標を共有しましょう

何のために行うか、「地域の子どもの健全育成のため」といった漠然としたものではなく、具体的な目標があるとなおよいでしょう。人によって子どもへの指示がちがうということも防げます。また、大人も子どもも、保護者とともに、体験活動の目的を共有することで、義務感やしづしづ感はなくなり、期待をもって参加することができます。参加の動機・活動中の優先順位・振り返りの視点と、一貫性を持つこともできるでしょう。

○子どもたちが楽しいと思えるプログラムを工夫しましょう

体験活動がマンネリになっていませんか？決して流行を追いかけたり、遠くへ出かけたり、お菓子をたくさん用意したりする必要はありません。子どもたちに「どんな活動がしたい？」と問いかけてください。たくさんのヒントが得られるはずです。

○高齢者とのふれあいを演出しましょう

高齢者はたくさんの経験と知恵をもっています。高齢者と多く触れ合うことで、子どもたちはそうした経験や知恵への尊敬や憧れを持ち、お年寄りを敬う心をはぐくんでいきます。高齢者の元気にもつながるはず。

○行政区をこえた活動にも取り組みましょう

子ども会活動や地域行事は多くが行政区ごとに取り組まれています。子どもが少ない地域では活動が下火になってしまうことも。複数の行政区で連携してできる取り組みについても進めていきましょう。

○子どもたちの可能性を信じましょう

「今の子どもは・・・」と言っていないませんか？子どもたちの本質はきっと昔も今も変わりません。豊かすぎる環境、危険から遠ざけようとする環境が、子どもたちの体験の芽を摘んでいます。「鍛えて、ほめる」。大人はゴールまでよりそう伴走者になりましょう。

(2) 家庭（保護者）と地域での体験活動をつなぐには

①家庭にのぞむこと

○地域とのつながりを大事にしましょう

面倒だなあ・・・と思う気持ちは子どもにも伝わります。忙しいのはお互いさま。少しでも時間をつくって顔をだしたり、あいさつをしたりするだけで、つながりは生まれてくるものです。あなたが時間ができたときに、地域で子どもたちの体験活動を支える立場になればいいのです。思い切って地域の人に子どもを託すことも大事です。子どもは家庭だけ、学校だけで育つわけではありません。子どもや、子育てに関する悩みを抱え込まずに、地域の人に頼り、地域の人とともに育てる、と意識を転換してみませんか。

○家庭の中で、体験活動についての情報を共有しましょう

体験活動は子どもだけのものではありません。参加するのは子どもですが、そのきっかけは保護者にあります。体験活動について、食卓で話題にしてください。「参加して、〇〇できるようになるといいね」と背中を押してあげてください。参加した子どもの変化を見逃さず、ほめてあげてください。お父さん、お母さん、おじいちゃん・おばあちゃん・・・それぞれの視点からの声かけで、子どもはより成長できるはずですよ。

②地域に望むこと

○すべての家庭とつながることをこころがけましょう

何度よびかけても参加しないから・・・とあきらめないでください。厳しい家庭環境にある子どももいます。また、いろんな事情で学校にいけない子どももいます。家庭環境の差が体験活動の差になることはとても悲しいことです。地域はすべての子どもの受け皿になるべきだと思います。地域だからこそ築ける人間関係や、地域だからこそ輝く子どもの個性がきっとあります。地域によっては、子ども会を任意加入制から、地域に住んでいる子ども全員を会員とする「全員子ども会」を立ち上げているところもあります。体験活動の差をなくすための工夫がはじまっています。

○地域で、情報の共有をもっと進めましょう

アパートや賃貸住宅に住む家庭に情報は届いていますか？転勤や住宅の購入ですぐに出て行ってしまふから・・・と、あまり関係が築けていない地域もあるようです。そうした家庭にこそ、子どもの体験活動を通じて、人間関係をつくり、地域の良さを知ってもらいましょう。地域への定住促進や、はなれても筑紫野市を応援してくれる人材になってくれることでしょうか。地域にアパート等が建設されるときは、地域の方から町内会の仕組みや子ども会への加入について、施主や貸主に話をすることも有効です。

5 子どもたちの体験活動をひろげるために社会教育委員ができること

前項に挙げた内容は、簡単なようで、実現するには難しいことであると思います。しかし同時に、繰り返し、辛抱強く呼びかけ、取り組んでいくことが重要であると考えています。そのために私たち社会教育委員としてできること、やるべきことを次のように考えました。

①委員個人としてできること

- ・折に触れ広く市民に、また自らの関わる地域や団体で、呼びかけていくこと
- ・自らの関わる団体や地域で実践し、そこから学ぶこと
- ・筑紫野市の青少年の状況・青少年に関する事業や、国・県等から出される資料について情報を収集し、発信していくこと
- ・地域の事例を収集し、他地域へ発信すること
- ・事例や情報をもとに、行政区をこえた体験活動をコーディネートすること

②委員の会としてできること

- ・各コミュニティ・スクール運営協議会と連携すること
- ・市PTA連絡会をはじめとする青少年関係団体や、小地区公民館連絡協議会やコミュニティ運営協議会などまちづくり団体との意見交換の機会を持つこと
- ・青少年に関する運動などの取り組みの背景や根拠について、保護者や関係者がこれを知る機会を設けること
- ・上記3点を見すえた、社会教育委員の選出方法を検討すること

これらのことは、まだまだ検討を重ねなければならないこともありますが、団体や個人の活動の中で、日頃の心がけで取りかかれることもあります。「できることから、地道にやる」という姿勢で子どもに関わることで私たち大人も成長していきます。子どもたちのために、豊かなふるさと筑紫野市のために、少しずつでも変えていく、変わっていく努力を、私たち社会教育委員も積み重ねていきたいと思えます。

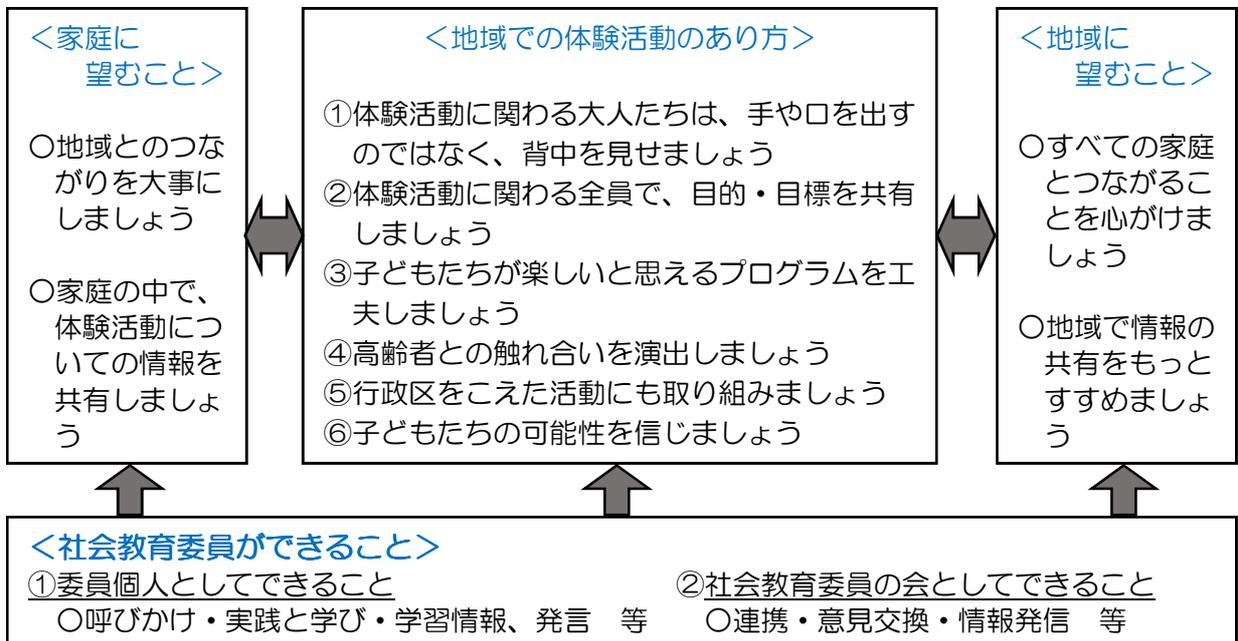


体験活動のススメ（全体構想）

※ 国立青少年振興機構の調査によれば、「子どもの頃の体験活動が豊富な人ほどやる気、生き甲斐を持っている人が多い」「少年期の体験が多い人ほど思いやり・やる気・人間関係力の資質・能力が高い」など、子どもの頃の体験は、その後の人生に影響することが結論付けられています。

自立した子どもの育成：豊かな人生の基盤となる資質・能力の育成

＜子どもたちの体験活動をひろげる＞



体験活動における課題＝「地域での体験活動のあり方」と「家庭と地域での体験活動をつなぐには」

子どもたちを取りまく環境

体力、運動能力の低下 コミュニケーション能力の低下 人間関係形成が困難

空間的側面

- 自然・広場などの遊び場は**減少**
- テレビゲーム等の室内遊び・インターネットの利用時間は**増加**

心的側面

- 自己肯定感（自尊感情）は**低い**
- 学習や将来の生活に対する期待は**低い**
- 友だちや仲間のことでの悩みは**増加**

6 地域での体験活動のあり方（筑紫野市における実践事例）

①「生活まるごと体験活動（通学合宿）」に取り組もう

通学合宿は、福岡県が発祥の地です。異年齢集団で生活技能を磨いたり、役割やルールを自覚したり、他人との協調性や責任感を育てたりすることが期待できるものです。さらに、通学合宿の実践は、地域の人々の人間関係の回復にも貢献するものです。この地域の人間関係の回復こそが、地域ぐるみの子育ての培養地をつくる営みといえるでしょう。この通学合宿の取り組みは、全国的に広がりを見せてはいるものの、地域で実施するとなると難しいものがあります。今後、地域や子どもの実態に合わせて実行委員会を組織するなどして、断続的な取り組みを進めていく必要があります。

地域での体験活動の問題点（留意点）は、およそ体験自体が「まるごと体験」として仕組みられていないことです。「段取り付きの体験活動」は、子どもに力をつけるという観点からは、有効性を欠くといわざるをえません。しかしながら、子どもは、やったことのないものはできない、教わったことのないことはわからないというのも事実です。関わる大人がどのようなプログラムを準備し、どのような支援をしていくのかが重要になってきます。

筑紫野市では、平成21年度に武蔵区での取り組みをはじめとして、22年度に岡田区と美しが丘北区、23～25年度に光が丘区において取り組まれており、中でも、23年度から27年度まで5年間継続して実施している山家地区の実施状況について紹介します。

<実践事例：山家通学合宿>

主催：山家通学合宿実行委員会

○ 活動のねらい

- ①生活体験をとおして子どものたくましく豊かな心を育てる
- ②保護者が家庭教育を見直す機会とする
- ③地域の子どもの地域ではぐくむ機運をたかめる

○ 活動の内容（活動プログラム）

会場・日数 山家1区公民館 6泊7日

参加者数 子ども15名（1年3名、2年1名、3年4名、4年4名、6年3名）
実行委員18名、地域ボランティア40名、中高校生ボランティア10名

初日（日曜日） 13時開講式、仲間作り活動

月～金曜日 6時起床、朝食、7:58バス登校～通常学校生活、15:16か16:46バス下校
帰宅後 班に分かれ掃除・洗濯・料理・買物活動、18時風呂、19時夕食・片づけ、
20時勉強・自由時間 21時半～22時就寝

最終日（土曜日） 荷物整理、10時閉講式

○ 活動の実際



合宿所(1区公民館)



参加の子どもたち



バスで通学



食事づくり



洗濯



掃除



宿題



洗濯物たたみ



高校生のお姉ちゃん！

○ 成果と課題

- スタッフ、ボランティアの助けを借りながら、協力し合って毎日の生活を自分たちでやっていた。
- 子どもたちからは「お母さんの大変さがわかった」「これからはできることはやろうと思う」など、親やボランティアの方への感謝の感想が多かった。
- 地域ボランティアの方も身近に子どもの生活を見ることで、子どもへの理解や親しみが深まったようだ。
- 学校との連絡体制に課題があった。(時間割の変更、プール利用など)
- 無理のない範囲でのボランティアを増やし、地域の中で通学合宿の意義を広めたい。
- 通学合宿に参加する子としない子に体験の格差が生まれることが懸念される。できれば6年間の内に、一度は参加するように促すことが出来れば良いと思っている。

②「困難体験活動」にチャレンジさせよう

人は、社会に出れば必ず困難な出来事に出会うものです。困難に対処する方法と辛くても逃げ出さないたくましさ、我慢強さを身につけておく必要があります。子どもは、決して楽しいことだけを体験したがってはいらぬわけではありません。

竜岩自然の家での筑紫野市子ども会育成会連絡協議会（通称：市子連）のキャンプでは早朝登山を実施し、子どもに達成感や充実感を体感させています。また、天山区では、多種多様な生物が守っている里地里山（さとちさとやま）を、体験活動を通じて実感させ、里地里山は自分たちで守らなければならないことを学ばせる「あまやまの里山」や「あまやまアジサイ園をつくろう」についての取り組みを紹介しします。

<実践事例Ⅰ：子どもたちとつくる「あまやまの里山」>

主催：あまやま里山環境保全の会（天山ふれあい会・天山子ども会・天山地区中學生育成会）

○ 活動のねらい

地球温暖化防止意識、天山の里地里山をもっと知り・愛する意識の高揚を目指す。
地域づくり（天山区民と児童生徒の交流）。

○ 活動の内容（活動プログラム）

(1)実施に至る計画・準備

- ・計画書（日時、場所、参加者、参加呼びかけ等）案の作成。案の役員審議、成案作成。
- ・あまやま里山環境保全の会の結成の全体会議、構成団体の役割分担会議等。
- ・福岡県ふくおかNPO・ボランティアセンターへの補助金申請、審査、補助金決定。
- ・筑紫野中学校、阿志岐小学校への事業説明および天山区住民、筑紫野中学校生徒、阿志岐小学校への参加呼びかけ。
- ・参加予定者への具体的指示通知。

(2)活動プログラム（平成26年8月8日）

8:00～ 8:30 出発式

8:40～12:40 山歩き（天山公民館～高木神社一童男少女岩稜線反射電波塔ニタの～天山公民館）

12:40～13:20 天山公民館で昼食（そうめん流し）

13:20～15:00 報告会のためワークショップ

15:00～16:20 班ごとの観察報告会

(3)参加数（自然観察会）

項目	自然観察会 （山歩き）	リリ流し 竹樋設置	リリ ゆがき	NPO職員	参加者 総数	リリ 寄贈
総数	44	7	7	2	60	多数
大人	6	7	7		20	リリつゆ寄贈
講師	5				5	ブルーベリー、 ミトト寄贈
小中学生	33				33	

(4) 予算：50万円

「子どもたちとつくる『あまやまの里山』と「あまやまアジサイ園をつくろう」の2事業。企業「アサヒビール株式会社」「九州朝日放送株式会社」が福岡県に寄付されたものを、福岡県・福岡県ふくおかNPO・ボランティアセンターが呼び掛けに応募し採択された。

○ 活動の実際



出発式



自然観察



ソウメン流し



ワークショップ



報告会

○ 成果と課題

- ・成果：自分の意思で参加するという行動、積極的態度の育成。環境に対する関心の養成。
地域の大人との交流：観察ワークショップと報告で自己表現の育成。
- ・課題：主催者側のスタッフの養成。資金の調達。子ども育成への親の考え方の育成（現在の心理学では子どもの脳の発達に遺伝的要素と環境の相乗効果であるという認識）。

<実践事例Ⅱ：あまやまアジサイ園をつくろう>

主催：あまやま里山環境保全の会（天山ふれあい会・天山子ども会・天山地区中学生育成会）

○ 活動のねらい

地球温暖化防止意識、天山の里地里山をもっと知り・愛する意識の高揚を目指す。
地域づくり（天山区民と児童生徒の交流）。

○ 活動の内容（活動プログラム）

(1)実施に至る計画・準備

- ・計画書（日時、場所、参加者、参加呼びかけ等）案の作成。案の役員審議、成案作成。
- ・福岡県ふくおかNPO・ボランティアセンターに提案、審査、採用決定。
- ・あまやま里山環境保全の会の結成の全体会議、構成団体の役割分担会議等。
- ・福岡県ふくおかNPO・ボランティアセンターへの補助金申請、審査、補助金決定。
- ・アジサイ苗の購入：地元アジサイ苗栽培業者との折衝、購入価格、株数、納入期日の決定。
- ・あまやまアジサイ園の看板発注：横 180cm×縦 90cm、アルミ製。
- ・筑紫野中学校、阿志岐小学校への事業説明および天山区住民、筑紫野中学校生徒、阿志岐小学校への参加呼びかけ、参加者集約。
- ・アジサイ園場所選定（26年度までに雑木除伐採を完了した場所広さ 50m×50m）と下草刈。
- ・アジサイ苗 12 樹類の植え付け場所のなわばり。
- ・参加予定者への具体的指示通知。

(2)活動プログラム（平成 26 年 12 月 14 日 10:00～12:30）

- ①参加者集合(9:30～10:00)：代表あいさつ（趣旨説明）、植え方の指導等、班分け
- ②植栽場所への移動と植栽活動
- ③豚汁、おにぎりでの参加者全員での昼食

(3)参加数（雑木除伐採場所に「アジサイ苗を植栽」）：93名

筑紫野中学校		阿志岐小学校		天山子ども会 保護者	天山ふれあい会 区民
生徒	親	生徒	親		
37	3	5	2	14	32

(4) 予算：50万円

「あまやまアジサイ園をつくろう」と「子どもたちとつくる『あまやまの里山』」の2事業。企業「アサヒビール株式会社」「九州朝日放送株式会社」が福岡県に寄付されたものを、福岡県・福岡県ふくおかNPO・ボランティアセンターが呼び掛けに応募し採択された。

○ 活動の実際



出発式



植栽(地元の大人との班編成)、親子での共同作業



昼食

○ 成果と課題

- 成果：自分の意思で参加するという行動、積極的態度の育成。環境に対する関心の養成。
手足を動かしてつくったという感動体験。地域の大人との交流。
- 課題：主催者側のスタッフの養成。資金の調達。子ども育成への親の考え方の育成（現在の心理学では子どもの脳の発達には遺伝的要素と環境の相乗効果であるという認識）。

③「子どもの居場所づくり（ふれあいの場所づくり）」に取り組もう

遊びは本来楽しいものです。また、遊びは社会性、協調性、体力、創造性、思いやりの心など多くの教育効果が期待できるものです。しかし、運動の二極化が生じている昨今、屋内で同年齢、少人数でテレビゲーム等で遊ぶ子どもが多い現状が気になります。今後は、意図的に子どもの日常生活の中に、体を使った遊びを復活させるようにすることが重要です。学校でも昼休みの仲間遊びを活性化し、様々な活動を通して異年齢の子ども同士の間関係を豊かにすることで、学校生活の楽しさや学力向上につながるものと考えます。

筑紫野市ボランティアバンクの会が阿志岐小学校区において、子どもの居場所（ふれあいの場）づくりとして開設している「あしきっこ子ども広場」についての取り組みを紹介します。

<実践事例：あしきっこ子ども広場>

主催：筑紫野市ボランティアバンクの会

- 活動のねらい：①むかしながらのあそびの伝承（ボランティア活動実践）
②地域のボランティアと子どものふれあいの場（世代間交流）
③子どもの居場所づくり

○ 活動の内容

- ・名 称：「あしきっこ子ども広場」
- ・日 時：毎月第1土曜日 10:00～12:00
- ・場 所：阿志岐小学校 体育館
- ・対象者：子どもたちとその保護者（当日体育館に遊びに来た親子）

○ 活動の実際



○ 成果と課題

- ・成果：子どもたちと一緒にってはしゃいだ爽快感や充実感を得ることができ、子どもたちが体を使って遊ぶことが大好きなのがあった。また、異年齢間の交流が図れ、ボランティアの真剣に取り組む姿が伝わり、子どもたちの心をつかんでいた。
- ・課題：継続的開催のためのボランティアの確保と、周知のための広報活動が必要不可欠。

④「働く・生産する体験活動」を積みませよう

利便化された生活の中で、子どもたちは、仕事（手伝い）をすることが少なくなっています。働くことを嫌がり、物を生産する喜びを味わうことなく消費することしか知らない子どもは、感謝の心や勤労の大切さ、物を大事にする気持ちが薄れてきます。また、どんな物にも、人が関わってできていることの基本認識を忘れず、汚れることを気にせず働く体験や苦労しながらものをつくる体験、作った物を大切に扱う体験などをしっかり積みませることが大切です。

筑紫野市では、青少年育成事業の一つでもある「BGレンジャー」（「ボーイズ&ガールズ チャレンジャー」の略称）を行政区において取り組まれており、平成26～27年度に実施している永岡区の活動を紹介します。

<実践事例：永岡BGレンジャー事業>

主催：永岡BGレンジャー事業実行委員会

○ 活動のねらい

サツマイモの植え付け準備から収穫に至るまでの作業や人との関わりを体験することで、地域を大切に思う心や感謝する心を育てる。また、このような体験活動の取り組みを行なっていくことで、志をもって意欲的に学び、自律心と思いやりの心を持つたくましい青少年に育つことを目的としている。

○ 活動の内容（活動プログラム）

サツマイモ植え付け準備（畑づくり・マルチ）、サツマイモ植え付け、サツマイモ植え付け後の管理（灌水・除草管理作業等）、収穫作業（芋ほり大会）、収穫祭

○ 活動の実際

[サツマイモの植え付け]



[収穫祭]



○ 成果と課題

サツマイモ栽培のような年間を通じて行なう体験活動を地域で実践することによって、地域の交流を更に活発にし、その中で人と人との繋がりが深まり、子どもたちも健やかに育っている。また、地域の年中行事として定着すれば、行事を体験したことのある中高生のサポートも期待でき、地域や人と人との繋がりが更に深まることのできる。「青少年に必要な体験」や「ふるさとを創っていく青少年をどう育てていくのか」などを地域の人が集まって話し合う良い機会にもなり、今後、地域が成長・発展していく可能性も期待できる。

⑤「ボランティア体験活動」に参加させよう

家庭や地域、社会のために何か出来ることをする、そして、役に立つ喜びを感じる体験は、豊かな心を育成する観点からも大切です。人間関係が希薄になってきている中、お互いに支え合う（相互扶助）社会をつくるために積極的に取り組んでいきたいものです。各中学校や地域では、年間を通じたボランティア活動がみられます。その中で、地域との結びつきを強めながら子どもの役割・出番・評価を大切にしている中学校の実践と、地域の活性化につながるまちづくりの実践を紹介します。

<実践事例Ⅰ：地域ボランティア 筑紫野中学校>

主催：筑紫野市立筑紫野中学校

○ 活動のねらい

- ①生徒とその所属する地域との結びつきを強め、地域を愛する心情や相互扶助の精神を養う。
- ②地域の大人との交流を通して生徒の社会性を養う。
- ③地域活動の中で役に立つ喜びや達成感を味わい、自尊感情を育てる。

○ 活動の内容（活動プログラム）

筑紫野中学校は、コミュニティ・スクールとしての取組を進め、平成 27 年で3年目を迎えた。この間、コミュニティ・スクールの一環として地域ボランティアや小学校ボランティアの参加を推進してきた。筑紫野中学校では、以下のようにしてボランティア活動への積極的参加を図っている。

- ①生徒による地区懇談会の開催〔6月〕
（各区長から、地域で行われている活動、地域づくりの取組紹介や中学生への活動の呼びかけ）
- ②地域ボランティア・小学校ボランティア一覧の提示と生徒の参加希望集約（参加希望の調整）
- ③地域ボランティアの実施〔7月～1月〕

○ 活動の実際

本年度は、地域ボランティア・小学校ボランティア合わせて76件の参加要請があり、延べ1,000名を越える生徒が参加した。



よきっこフェスタ(吉木小)ボランティア



二日市東小学習ボランティア①



二日市東小学習ボランティア②



俗明院夏祭りボランティア



朝倉街道団地夏祭りボランティア



吹奏楽部敬老会演奏ボランティア(牛島区)

○ 成果と課題

ボランティア活動を通して、生徒たちは地域の方々から頑張った姿を誉められたり頼りにされたりする経験をしている。こうした誉められたり頼りにされたりする経験が、生徒自身の自尊感情や有用感を高める上で役立っている。また、小学生に対する学習支援や活動の援助を通して、世代間を越えた人間関係づくりにもつながっている。

<実践事例Ⅱ：パープルナイト 2015>

主催：まちづくり NPO 法人ほっと二日市

○ 活動のねらい

- ①自分たちが作ったものが、冬の夜道をすこしでもほっとキラッとさせて商店街の賑やかな雰囲気作りをおこない訪れた人に楽しんでもらおうという、地域の活性化につながるまちづくり活動の経験をする。
- ②イルミネーションの飾り付けをとおしてもものづくりの楽しさを経験してもらい、その作品を他の人に鑑賞してもらう展示の喜びも体験してもらう。

○ 活動の内容（活動プログラム）

2012年から子どもたちのイルミネーション・ツリーづくりを実施。

参加者（11月21日）：中央区子ども会 12名、他親 4名（これとは別に湯町の子ども会も別会場で2台作成して商店街に設置）、ほっと二日市ボランティアスタッフ 3名

制作は、ワイヤー式ツリーをベースにイルミネーションと装飾品で子どもたちが飾り付けを行い、完成したものをイベント期間中に商店街の通りに展示する。

ほっと二日市のボランティアスタッフがサポートしながら、子どもたちが思い思いに飾り付けを行う。完成したイルミネーション・ツリーは、それぞれ製作した子どもの名前と作品タイトルを記載したプレートを取り付けて、他のイルミネーションと台座に固定して、商店街内のイルミネーションで飾られた樹木と一緒に設置する。

○ 活動の実際



飾り付けの様子



ふれあい広場イルミ会場



商店街（オープニング）
九産高校マーチング



商店街夜景



制作したイルミネーション

○ 成果と課題

- ・パープルナイト 2015 は、12月5日から25日まで開催された。5日の点灯イベント「ほっとキラッと二日市」では、二日市中央通り商店街のふれあい広場にて市長をはじめたくさんの来賓の方々も来られて、恒例の九産高校吹奏部のマーチングと演奏で盛大に行われた。
- ・期間中、子どもたちの制作したイルミネーション・ツリーも商店街内に展示されて、多くの人に見てもらえる機会が得られた。
- ・今後の課題について、まちづくり NPO 法人ほっと二日市としては、最終的には子どもたちはもちろんのこと、近隣住民や様々な方の参加で、まち全体がイルミネーションで彩られたほっとキラッと温かな二日市になることを目標にしている。

⑥「地域が好きになる体験活動」に取り組もう

夏休み等の長期休暇は、子どもたちが地域に戻ってきます。夏休み期間を利用し、公民館などの施設で地域の仲間と遊びや学習を通して仲間づくりをします。地域には、様々な人材が隠れていますし、地域ならではの場所もあります。秘められた地域の力で子どもが成長します。子どもも大人も地域がもっと好きになるはずです。

筑紫野市では、「ステキな夏休み教室」を実施し、平成 22 年度に俗明院区、23 年度に湯町区、24 年度に本町区、そして 25～27 年度に宮の森区と牛島区、桜台区が取り組まれており、その中で桜台区の実施状況について紹介します。

<実践事例：ステキな夏休み教室 in 桜台>

主催：桜台区（地域福祉審議会）

○ 活動のねらい

- ①子どもたちに自分の住む地域の良さを体得してもらう
- ②同じ地域に住む者同士の交流を深める
- ③地域の大人（ボランティア）との交流の中で近所の大人との親近感を深める
- ④「ステキな夏休み教室」で学んだことを家庭や地域で活かす 等

○ 活動の内容（活動プログラム）

3日間で様々な体験活動を仕組む（自主学習、調理活動、遊び体験、創作活動、ピアサポート、読み聞かせ等）異年齢の班活動

○ 活動の実際



開校式



区長挨拶



調理活動



ピアサポート



体験活動



閉校式

○ 成果と課題

- ・子どもから大人まで楽しく生き生きと活動し、開催することの「よさ」を実感することができた。
- ・ステキな夏休み教室に参加することで、その後の行動では食に関心を持つようになり、積極的・自発的な行動の変化等が見られた。
- ・地域から多くのボランティアとコーディネートする人などが求められ実施するハードルが高いように思われるが、実践を継続することで課題解決が図られる。

※会場（公民館等）があれば子どもたちを中心にしながら、地域力や組織力アップも期待できる。

7 家庭と地域の体験活動をつなぐには（家庭に、地域に望むこと）

子どもの体験活動の充実には、家庭が大きな役割を果たします。睡眠や食事などの家庭での規則正しい生活ができていなければ、子どもは無気力になり、地域活動の参加意欲もわきません。例えば参加しても、十分な活動や成果は期待できないものです。つまり、家庭生活は、子どもの体験活動を推進する重要なカギを握っているといえます。子どもにとって最も身近な指導者である保護者が、体験活動の必要性やその基盤となる家庭生活の重要性を認識してもらう必要があります。

子どもの体験活動を充実させる上で、家庭で取り組んでもらいたいものは次のような内容です。これらは特別なものではなく、学校教育でもすすめられていることであります。学校での体験活動が家庭や地域で活かされ、家庭や地域での体験活動が学校生活で活かされることを考えれば、それぞれが連携し効果をあげることが必要です。

① 家庭での生活リズム（基本的な生活習慣）を確立しましょう

生活リズムの乱れは、食欲不振や心身の疲労感をもたらし、学習や諸活動の意欲を奪います。

子どもの生活リズムの乱れの責任は家庭にあり、まず保護者自身の生活を見直すとともに家庭の責任において子どもの望ましい生活のリズムを確立するように啓発していく必要があります。

② 家庭での映像メディア漬けから脱却しましょう

メディア漬けの生活は、無気力で体験活動や学習への関心や意欲を持たない可能性が高くなるという調査結果もあります。

家庭で話し合いながらルールを決めるなど、メディアと主体的にかかわることの大切さを啓発していく必要があります。

③ 家庭での手伝い（仕事）を習慣化しましょう

家庭で手伝い（仕事）をしていない子どもが増えています。

家事を分担させることは、親子の会話を増やすとともに責任感、自立心、自己有用感等を育みます。

子どもは、失敗して当たり前、できなくて当たり前という前提で根気強く取り組んでいく必要があります。

④ 家庭での読書活動をすすめましょう

読書活動は、心を豊かにし、人生を豊かに生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものです。

活字離れが進んでいる昨今、日常の家庭生活の中で本に親しむ活動を意図的にし、読書習慣の確立が求められます。

8 社会教育委員の会として・・・

子どもの体験活動の充実には、学校教育と社会教育の連携は必要不可欠です。

学校内外での子どもたちの体験活動を充実させるには、それぞれの専門職員である指導主事や社会教育主事が共通認識のもと連携・協力し、学校や家庭、地域に対して指導や助言を行うことは、大変効果的かつ実効的と思われます。

では、社会教育委員の会が子どもたちの体験活動を広げるためにできること、やるべきことは何でしょう。

社会教育委員の会としてできることは、この提言（理念）を徐々に実践にうつしていくことです。

しかし、学校や団体、関係機関との連携、情報発信の工夫など課題は山積しています。

筑紫野市全体で学校教育行政と社会教育行政が連携し、協働的に取り組みを推進していくことができるような新たな提言内容と、その実践化の道筋は、次年度以降の課題と考えています。

動く社会教育委員として、チームを編成し研修・研究する、先進地を訪問し学び・活かすなどをして、子どものために、豊かな「ふるさと筑紫野」のために微力ながら努力・精進していきたいと思えます。

「今、自分ができることから、地道にやる」という基本姿勢を忘れずに・・・。